文芸思潮短歌季評

前号に続いて、角川の短歌誌「短歌」今年の九月号を取り上げたい。巻頭は小池光（短歌人）の「また夏は来ぬ」という二十八首である。

この夏を楽しまむとてわがかぶる南米エクアドルの麦藁帽子
黒日傘さしてあゆめる宮の橋女人ひとりはいづくへ行くか
学校教師やめて十八年　妻なくして十三年　また夏は来ぬ
ロマンポルノの片桐夕子も死にたりし「夕子の白い胸」われは観たりき

年配の御仁のようで、思い出だけに縋って生きている寂しさが漂っている。歌も繋がっていずバラバラで、苦労してやっと題材を見つけて溜息をついている歌群で、読んでいる方も老年の貧しい日常に無理に付き合わされている虚しさに包まれる。「学校教師」の歌も、「十八年」と「十三年」のところを空欄にして、何十万人もいるはずの元教師を当てはめれば、同じ歌が何万首もできそうなありきたりの述懐である。「ロマンポルノ」の歌も低俗で、こんなことしか歌に詠めない貧しさには、辟易する。老人の特権は、思い出の集積によって、その奥にある人生の摂理の深淵に触れることにある。それへの肉薄は微塵も感じられない。

二番目は道浦母都（未来）の「紀州行」二十八首である。

紀伊水道過ぎて潮の青深しわがうぶすなの海の群青
車窓から見えるヤマボウシの白き花線路に流れる銀漢のごと
紫陽花のあふれる家家見えて過ぐ泉州平野のっとりと夏
駅弁の「六甲山縦走」紙ブタを開いてみると明石の煮ダコ

同じように最初の四首を挙げてみたが、短歌として胸に迫ってくるものがない。「潮の青深し」と歌っていながら、また「海の群青」と青を出してくる重複はそれだけで拒否感を呼ぶ。また「うぶすな」のイメージはあまりに使い古された紋切り語。二首目の「車窓から」の歌も、これは明らかに昼の叙景であるにもかかわらず、白い山法師の流れすぎるように映る様が「銀漢」――天の川と喩えているのは、連想の貧しさを露呈している。昼に天の川はないだろうし、また葉の緑の中を白いものが飛び過ぎる様を天の川のようだと喩えるのは、無理がある。四首目の「駅弁」の歌も、感動の対象があまりにお粗末で、「煮ダコ」がかわいそう。歌に詠む題材ではない。

三人目は東直子（かばん）の「砂上の舞台」。

夜を見る夜が広がるただ一人の人間として靴紐むすぶ
蟻の巣に運び込まれている翅の輝きながら無になるまでの
昼寝から目覚めたときのさざなみの外の温度をGPSに尋ねる
生まれた場所カリフォルニアと聞きましたしんしん動く電子頭脳の
大きなもの、抽象的なものを歌に盛り込んで、それで現代風の味付けをして悦に入っているだけの歌群には、心に響いてくるものはない。逆にその知識や認識は底の浅いものであることを露わにしている。「外の温度をSiriに聞く」くらいだったら短歌なんか作るなと言いたい。コンピューターに歌を作ってもらった方がまだマシな歌になるだろう。また電子頭脳の生まれた場所が「カリフォルニア」と言うのも、生齧りの知識でしかない。こんな浅い知識で現代風の味付けをしようとするところに、浅さと汚さが見える。

四人目は佐佐木幸綱（心の花）の「世田谷区のキツネ」。現地の人に見えざる帯よ今朝も画面に線状降水帯という赤いかたまり
線状降水帯の帯の重たさ　二階建ての家が崩れるテレビを見たり
走り来るキツネ見てより通るたびに斜面の道をいつも見上げる
世田谷区にキツネは何匹いるのだろう人口は九十一万八千と聞けり

朝日歌壇の選者の一人だが、表層的な感受に、致命的な生命感の喪失を感じる。テレビを見て「大変ですね」と言っているに過ぎないことを歌にしてよく恥ずかしくないなと呆れるし、キツネと人の数を比較して感興を掻き立てるのも、あまりに貧弱で、この人にも「短歌は算数じゃないのよ」と言う小学生の言葉を投げつけたくなる。こんな短歌が日本の歌壇をリードしているのかと思うと情けない。

以下は似たり寄ったりで、批評するのも嫌になるが、救いを覚えたのは、後半の「結社賞受賞歌人大競詠」のなかの何人かの歌人である。これらには皆、命の実感がある。

田中聖子（歌と観照）「偕老」
睡蓮の開花し始め純白の吐息つくごと風白むなり
妻を探す雉子が遠くで鳴いている五感六感研ぎ澄ましつつ
芋環のむらさき褒めて酔漢の通り行きたり花うつむきぬ
絵馬奉納書くべき祈願の特になくただ偕老の礼申すなり

森田道子（運河）「百年の家守」
百年の家守山守来し我ら九代目にして子は跡継がず
重き蔵の扉を開けて暗き中に一人泣きたり嫁ぎし頃に
三人の子を置きしまま三年間難病に倒れしわれ四十五歳
庭松に吊る石斛と忍草六十余年のわれを見てゐん

重信房子（月光）「ベイルート哀歌」
虎落笛ちぎれる君の決意聴く退路を断ちて往く旅のこと
落暉燃える怒り哀しみ地中海　友らが友らを殺したと言う
最後だねランボー語り見つめ合うベイルート五月　ジャカランダ満つ
墓碑も無く砂漠に佇む友のため語り継ぎたしまほらの命

重信房子は獄中からの「月光の会」への参加である。

（五十嵐勉）

現代語訳
五たび歌よみに与ふる書
連載第五回

正岡子規

心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るる不尽の嶺

という歌は村田晴海の作と記憶している。これは富士山の裾野より見上げた時の即興の歌であろうが、私も実際にこのように感じたことがあるのでおもしろい歌だと一時は思っていたが、あらためて読み直してみると拙い下手な歌である。それはまず第一に「麓」という言葉がいかがなものであろうか。あて推量に見た所は、少なくとも半分ほどの高さであるべきなのに、それを「麓」と大袈裟に言うのはいかにも大仰で疑わしく感じられる。第二は、それをあえて善しとしても、「麓にて」の一句は理屈っぽくなっていて興が削がれる。あて推量に見た雲より頂上は遥かに上にあったとだけ言えばすむところである。第三には、富士山の高く壮んなことを詠むのであれば、もっと力強い歌にせざるをえないであろう。しかるにこの歌の姿は弱くて、とうてい富士山に添い得るものではない。几董の句に「晴るる日や雲を貫く雪の不尽」というのがあるが、尋常に叙しているだけにもかかわらず、富士山の趣はかえってよく現れている。

もしほ焼く難波の浦の八重霞
一重はあまのしわざなりけり

契沖の歌で、俗人が伝えるものだが、この歌の品が下がっていることは、少し心ある人ならば承知していると思う。この歌の伝唱されている根拠は、言うまでもなく八重一重の掛け合わせにあるのだが、私が攻撃するのもまさにその一点にある。総じて、同じ歌において極めて褒めるところと、誹るところとは同じ一点にあるものである。「八重霞」というものは、もとより八段に分かれて霞んでいるものではないから、「一重」というのは、いっこうに効果を挙げていない。また初めに「藻塩焼く」と置いてしまっているのだから、後で煙とも言いかねて「あまのしわざ」と主観的に言ってしまったところが、ますます俗に堕ちる結果になったのだろう。こんなふうに詠まなくても、霞の上に藻潮焚く煙のたなびくことを普通に詠めば、つまらないまでも、このような厭味はかけられないであろう。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

この躬恒の歌は、百人一首にあるので誰でも口ずさんでいるくらいよく知られているけれども、この歌は一文半のねうちもない。この歌は嘘の趣向である。初霜が降りたくらいで白菊が見えなくなるものではない。趣向が嘘なので、趣も糸瓜になっている。おそらくそれはつまらない嘘であるからつまらないので、上手な嘘はおもしろい。例えば「鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」はおもしろい。躬恒の歌は些細なことをやたらに大袈裟に述べただけなので、趣味が低くなっているけれども、家持のは全くないことを空想で現して見せているので、おもしろく感じられるのである。嘘を詠むならまったくないこと、とてつもない嘘を詠むべきであろう。そうでなければありのままに正直に詠むのがいいだろう。雀が舌を剪られたとか、狸が婆に化けたなどの嘘はおもしろい。今朝は霜が降って白菊が見えないなどと、真面目らしく人を欺く大袈裟な嘘は、極めて殺風景なものである。「露の落ちる音」とか「梅の月が匂ふ」とか言って楽しむ歌よみが多くいるが、これらもおもしろくない嘘である。すべて嘘というものは、一、二度はよいけれど、たびたび詠まれては、おもしろい嘘もおもしろくなくなってしまうものである。ましておもしろくない嘘はいうまでもなくいただけない。「露の音」「月の匂」「風の色」などはもはやこれまでに十分現れてきているので、今後の歌には再び現れないようにしたいものである。「花の匂」などというのも、おおかたは嘘である。桜などには格別の匂いはなく、「梅の匂」でも古今集以後の歌よみが歌っているようには匂わない。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる

「梅闇に匂ふ」とこれだけですむことを三十一文字に引き伸ばした御苦労は恐れ入った。こうしたこともこの頃は珍しいものとして許しているようだが、あわれな歌人たちよ、「闇に梅匂ふ」の趣向はもはや打ち止めにされてはいかがか。闇の梅に限らず、普通の梅の香も「古今集」だけで十余りある。それ以来今日までの代々の歌よみが詠んだ梅の香は、夥しくて数えることもできないほどであるから、これもいい加減に打ち止めて、香水香料に特に用立てるようなことはもうやめて、もう歌にはいっさいこれを入れないこととして、鼻詰まりで鼻の感覚がないと嘲られるほどにこれを遠ざけるようにしてはいかがだろうか。小さいことを大きく言う嘘が和歌腐敗の一大原因と見える。

（現代語訳／五十嵐勉）

※村田晴海（1746-1811）／江戸後期の歌人・国学者
※高井几董（1741-1789）／江戸中期の俳諧師
※契沖（1640-701）／江戸中期の真言宗僧侶・国学者・歌人

※凡河内躬恒おおしこうちのみつね（898-922）／平安時代前期の歌人・宮廷人　三十六歌仙のうちの一人